

未来への伝承

第191回

徳川齊昭と土屋寅直

手紙にみる2人の「キャリア」

水戸徳川家9代当主斉昭が土浦土屋家10代当主寅直に宛てた手紙があります。2人はいとこ同士であり、斉昭は徳川一門として、寅直は譜代大名として江戸時代末期の幕府政治を支えました。

一見何気ない近況報告に見えるこの手紙ですが、実は当時の2人の立場や状況を伝える重要な史料です。手紙の内容から、彼らの大名としての「キャリア」を考えます。

手紙の日付は重陽(菊の節句)翌日の9月10日です。年次の明記はありませんが、内容から安政2(1855)年と考えられます。このとき、斉昭は江戸、寅直は大坂にいました。手紙の中で、斉昭は、幕府から江戸城への隔日登城を命じられたことを報告しています。

斉昭が近況として伝えている隔日登城とは、幕府からの諮問に答えるため江戸城に数日ごとに登城するもので、同年8月14日に命じられています。このときすでに隠居していた斉昭ですが、強い指導力と尊王論で世間の声望を得ており、ペリー来航直後の嘉永6(1853)年7月2日にも隔日登城を命じられています。手紙の中で、斉昭は「私が役に立つとは思えない」と漏らしますが、幕府は、国内外の政治問題に対処する上で、斉昭の影響力を無視できなかったのです。

追伸では、以前より寅直から相談を受けていた江戸帰りの件に返答しています。ここである江戸帰りとはい、老中就任を指します。この手紙が書かれる約ひと月前、江戸で2人の老中が辞職しています。寅直はその後任となることを望み、斉昭に相談したのでしょうか。当時、寅直は大坂城代という幕府の要職にありましたが、さらなる出世を望み、

老中を目指していたのです。

寅直からの相談に斉昭は、「親しい間柄にある自分があるたを推薦すれば周囲の疑惑を招く」と述べ、助力が難しいと伝えます。一方で、「老中たちから後任の相談があれば、あなたの希望を妨げるようなことは言わない」とも述べており、寅直への配慮もみられます。最後に助言も忘れません。「老中就任の可否によらず、国の役に立つよう心がけよ」と激励し、有能な家臣を積極的に登用するよう勧めるのでした。

江戸時代末期に幕府を支えた斉昭と寅直。2人の親密な関係と、大名としての「キャリア」がうかがえるこの手紙は、5月6日(火)まで市立博物館で開催中の第46回特別展「まなびのかたち―江戸時代のキャリアデザイン」にて展示しています。ぜひご覧ください。

市立博物館(☎824・2928)



▲土屋寅直肖像(「亀城会会報」第4号所載)